

思い浮かべながら、大井は努めて平静を装い返事する。

「なに言ってるの。よそじゃなくて、うちの鎮守府だつてば。で、どうなの？ 大井は秘書艦よくやつてるでしょ？ 何か聞いてないの？」

興奮してまくし立てる蒼龍の声がだんだん大きくなる。

「提督が、新しく誰かとケツコン、ですか……？」

ここ数日の秘書艦業務の中で提督と接して、彼はそんなことを一言も漏らさなかった。

彼は本当に重要な決定は秘書艦にすら囚らず自分の胸の内だけで決めることがある。男女の結婚とは異なるとはいえ、ケツコンは艦娘にとつては一大事だ。もし本当に彼がそんなことを画策しているのだとしたら、事前の情報漏れを恐れて誰にも話さないというのはいえ。

「私は何も知りませんが。蒼龍、その話をどこで？ 本当に確かなんですか？」

「えっと、私は明石から……」

「明石、ですか？」

ケツコンと最も縁遠そうな機械マニアの工作艦を思い浮かべて大井は首をひねる。明石は戦線の拡大と共に増加する損害に対応すべく、各鎮守府に派遣されてきた艦娘の修理を専門とする珍しい艦娘だ。同型艦も居らず、戦闘にも全く向かない彼女は出撃することもなく船渠と工廠にこもりきりで修理と、装備の改修を行っている。こういう噂話からは最も無縁の艦娘だと

思っていたのだが。

「あの娘がそういう話に詳しいなんて意外だったよねえ」

飛龍が話に混じってくる。

それについては全く大井も同感だった。ケツコンする艦娘はどうしても限られているから、していない者には妙な誤解をされていることがある。今回もそういうことではないだろうか。

無縁そうな明石が何か早とちりしたのは、と大井が思ったところで、北上がまた別の方向から切り込んだ。

「ねえ大井つち、きっと明石も誰か別の娘から聞いたんじゃないかな」

「別の誰か、ですか？」

長時間の修理の話し相手として明石は鎮守府の中に広く人間関係を築いている。大井も小破未満のときに何度か彼女に面倒を見てもらったことがあるが、明石が自らの艦装を用いて大井の艦装の修復を行う間、明石自身は大井の話し相手になっていた。

そこまで考えた大井は、明石との会話の記憶から一つの可能性に思い至る。

明石から少し遅れて着任した、同じく同型艦の居ないやや特殊な艦娘。彼女と明石の艦娘寮は同室で、二人は随分と仲良くしていたはずだ。

「もしかして、噂の元は大淀さんなんじゃないですか？」

「なるほど大淀ね。あの娘つたら……」